

4 内部空間計画

何十年と暮らし続ける住まいです。部屋毎の計画もさることながら、住まい全体がまとまった計画となっているかのチェックも重要です。

ライフサイクルに合わせやすい間取りとなっているか、使いやすく心地よい住まいとなっているか、光や風を取り込みやすく設備が交換しやすいシステムになっているかなどです。

1 融通のきく計画

配慮したいこと



■壁の配置

地震や風の力に対抗する耐力壁をできるだけバランス良く外回りに集め、生活の仕方を工夫することによって、内部の間仕切壁・建具を減らすことができます。

建設当初のコストが下がるばかりか、将来の増改築に対する自由度が増すことになります。

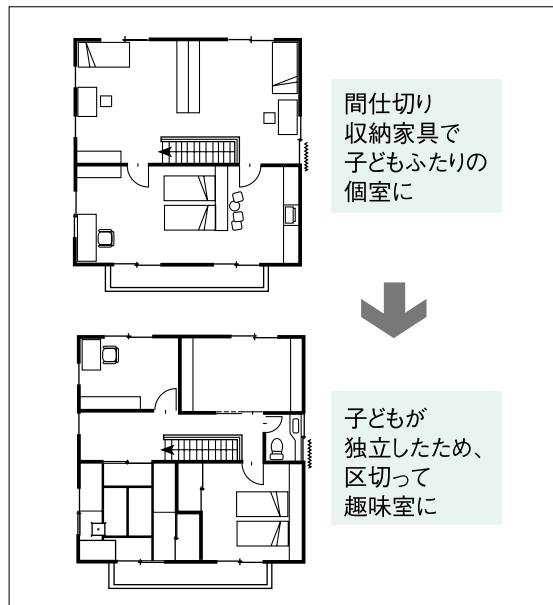
例えば、車いす使用などの身体状況になって、便所の広さが不足するような場合でも、無理なく便所を広げられるように、隣に収納スペースを配置する平面計画などの方法もあります。同じように、将来ホームエレベーターを設置できるように、収納スペースや吹き抜け空間を工夫するなど、将来のことを見据えた間取りの工夫をしておきましょう。

■柔軟なレイアウト

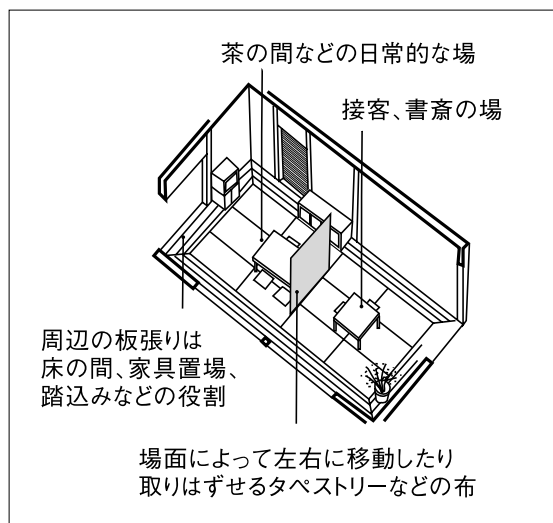
一つ一つの部屋の役割を限定しすぎると、ライフサイクルやライフスタイルの変化についていけず、使いづらい住まいとなります。

時間や場面に応じて室内のレイアウトを変える、日本古来の「しつらい」という考え方は融通性が大きく、有効なゆとりを生み出しますから、その良さを活用したいものです。

参考図など



●融通のきく住まいのイメージ



●しつらいによる柔軟なレイアウトのイメージ

2 動きやすい間取り

配慮したいこと

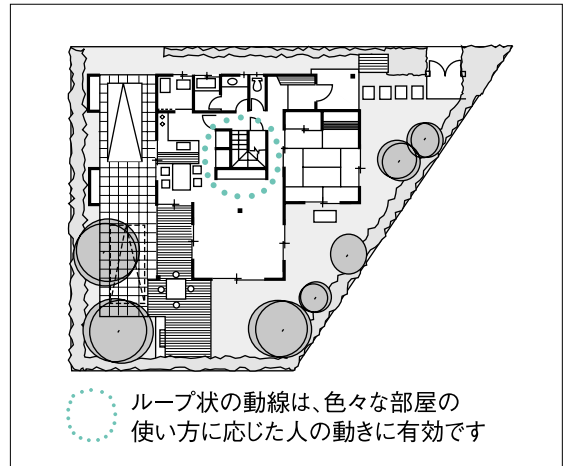


どの部屋へもスムーズに移動できるように、間取りを工夫することが大切です。

回遊性のあるループ状の動線は、接客時における湯茶のサービスや、客のいない部屋での家族への食事サービスなどが同時に対応できるなど、使いやすい住まいの要素です。

また、増改築時には、動線の設定が容易になり経済的です。

参考図など



●ループ状の動線があるイメージ

3 安全に移動できる間取り

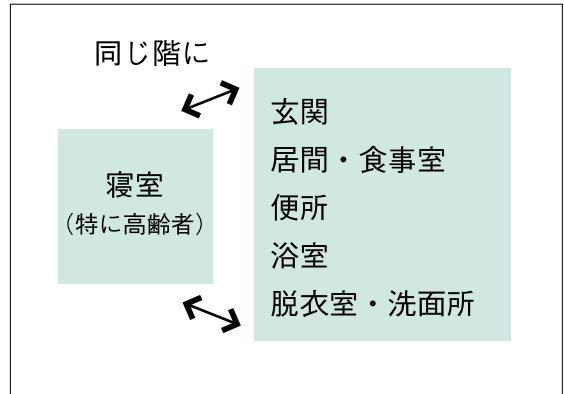
配慮したいこと



頻繁に使用する部屋への移動経路をわかりやすく安全にしておくことが重要です。

玄関、便所、浴室、居間・食事室、洗面所・脱衣室など頻繁に使用する部屋は寝室（特に高齢者の寝室）と同じ階に計画することが望まれます。

参考図など



●寝室は頻繁に使用する部屋と同一階に

4 だれもが安心できる間取り

配慮したいこと

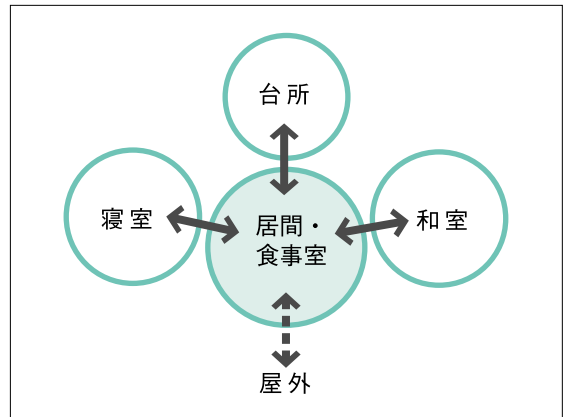


安心した住まいにするために、家族の生活がお互いにわかるような間取りにしましょう。

家族の交流の場である居間・食事室を中心的空間として、それぞれの部屋を配置することが大切です。

また、子どもが幼児期には夫婦の寝室と子ども部屋を隣接させるなど、安心して過ごせる配置を考えましょう。

参考図など



●部屋の配置の考え方の例

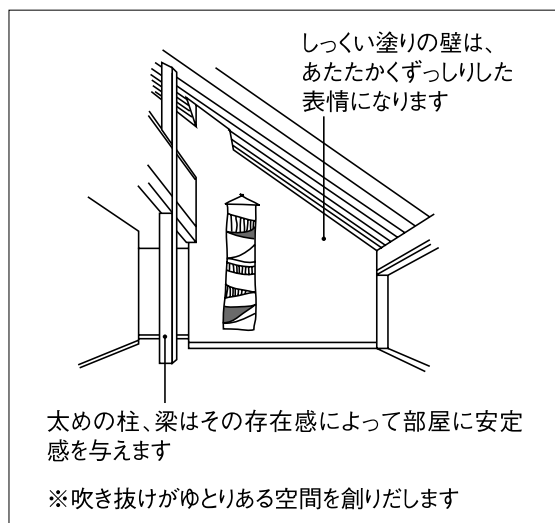
5 ゆとりある計画

配慮したいこと



家族構成にあった間取りや部屋の広さの確保とともに、ゆとりある単位寸法の採用や吹き抜けや続き間による心理的な広がり確保することなどにより、将来にわたって誰もが使いやすく心地よい「ゆとり」を感じる計画としましょう。

参考図など



●ゆとりある部屋のつくりのイメージ

6 動作の安全を考えた計画

配慮したいこと



歩く、立つ、座るなどの動作が安定した姿勢で行えることやつまずきによる転倒事故が起きないような安全面に対する配慮が住まいには必要です。

各部分の寸法や素材の選び方など、それぞれの場面での細やかな配慮が大切です。

参考図など



●幅の広い廊下

7 住まいの設備

配慮したいこと



設備機器の耐用年数は住宅本体と比べてかなり短く、住宅本体の老朽化以前に2度3度と更新することが必要になってきます。

そのため、交換が簡単にできることを第一に考え多機能製品を用いず、必要に応じて適宜オプションを追加変更していくことが大切です。

家族が暮らしていくために必要な機能が何か、使用する時間や場所も同時に考えて、使いやすい設備を選択することが大切です。

参考図など



●住まいの設備(台所)